2022年度ダンス公演当日に
基調講演＆トークセッションを開催しました。

トークセッション「アートと社会包摂」

〔株〕ニッセイ基礎研究所
芸術文化プロジェクト室主任研究員
大澤寅雄

ダンサー・俳優
森田かずよ

追手門学院大学地域創造学部准教授
草山太郎

モデレーター：森隆一郎〔合同会社渚と〕

一人ひとりを見て、それぞれを表現していく作品づくり。

――今年度のダンス公演について、まず感想をお願いします。

森田：本日はありがとうございます。9月から稽古をやってきて、今日の公演になります。昨年はコロナ禍の対応で精いっぱいでしたが、今年は一本の流れをつくって作品のクオリティを分かりやすくすることにフォーカスしています。
今回はいろんな年齢の方が来てくださいました。参加者の年齢層が広くなっても「障害がある」と「障害がない」の境界線は特にありません。誰が障害か分からないということではなく、この人は不安が強いとか、振りを覚えるのがちょっと苦手とか、そういう感じです。誰が障害かではなく、それぞれの人を見ていくことが今年は特に多かったと思います。

――たくさん学生が出ていらしたのは草山先生の教え子さんたちですね。

草山：白シャツと黒いボトムを着ているのがゼミ生で、3回生18名、4回生3名の総勢21名です。公演が始まる寸前まで、森田さんと最後の詰めの稽古をしていたので「大丈夫か？」と心配でしたが、笑顔で楽しくやってくれていましたから、まずはホッとしています。

――大澤さんはオンラインで舞台をご覧になっていかがでしたか？

大澤：印象に残ったシーンがあります。最初と最後「あなたの夢はなんですか」というところ。それから途中「ゆめ、むずかしい」って出てきたシーンがいちばん、共感した瞬間でした。

森田：ありがとうございます。実はいちばん悩んだシーンです。稽古の時にみんなに夢を描いてもらったんですが、あれを描いた彼女はすごく大変だっただろうと思うんです。でも、これを絶対に出そう、あのシーンで彼女に居てもらおうと思って。

――つくる側の葛藤は大変だったと思います。

森田：「居る」ことが不安になってしまったり、どうしていいか分からなくなってしまったり、自分のことをうまく読み取れず表現できなかったりする人たちと一緒に、どうすれば続けていくことができるのか？　作品づくりを通して「居続けられるかどうか」を本当に考えてきました。

――どのように振り付けされたのでしょうか？

森田：本来は振付師さんや演出家さんが最初に想定してつくられると思うんですが、私はどうしても人の顔や身体を見てからでないとできないんです。稽古当初にいろんなワークショップをやってみて、3回目に好きなことを1分間見せてもらう時間を設けました。踊ってもいいし何をやってもいい、そこから何が好きなのかを見てつくりました。
ミドル～シニアの方には、その世代にしか出せないものを踊ってもらいたくて。それぞれの人生を絵にしてもらいました。描いた絵を別の人と交換して、受け取った人の解釈で読み取って自分なりに振り付けしてもらったんです。

――私たちは、人生を見ていたんですね。

森田：そうです。「すごいね！」としか言えないぐらい、皆さん波瀾万丈でした。

大澤：ダンサーの皆さん、堂々としていましたね。僕だったらどう見られているかを考えてしまって、恥ずかしさや不安が出てしまう気がするんです。でもそうじゃなかった。みんな自分を出していて、すごいと思いました。

森田：特に最初の部分ですね。あの場面も稽古の時、グループごとにそれぞれのポーズを考えてもらったんですよ。みんなの自己紹介になるようなオープニングにしたくて。去年は半分オンラインだったこともありますし。「これからこんな人が出ますよ」っていうものを表現したかったんです。

対等でなくても、限りなく一緒の目線に立つためには？

――このプロジェクトはそもそも草山先生が森田さんのダンスを見られた時に直感で「やりたい！」と思われたのが始まりなんですよね。

草山：瞬間湯沸かし器のように「ゼミでやってみたい！」と思ったんです。外部の人たちと関係をつくって、一緒に経験できるというのはすごいことですし。ソーシャルアートや社会課題をテーマとして「共生社会とは？」「共に生きる社会ってなんだろう？」と考えていく上で、ダンス公演を地域の人と一緒に経験しながら、共に生きる社会・生きる場をどうつくっていけばいいのか模索してみようということで始めました。

――この2年間、学生さんと一緒にやってこられて、今日までのプロセスで変化を感じられましたか？

草山：主催の茨木市文化振興財団にとっても、学生にとってもいい経験になったと思います。もちろん難しい面もありました。ゼミ生は一生懸命やってくれているけれど、限界や制約というものも感じています。

森田：学生さんは障害のある参加者にどう寄り添っていいのか悩んだと思います。優しい心があるので「何かをしてあげなければ」「引っ張っていかなければ」と思ってしまうんです。でもそうではなくて「同じ人として向き合っていてね」と、何度か話をしました。

大澤：与えられている場で役割を自覚しているからこそ、その範囲で精いっぱいパフォーマンスをしたり、学んだりするわけですが、人生は与えられるものではないですからね。僕はここ数年、障害がある人の文化芸術活動を調査・研究しています。例えば、街でつえを突いて歩いている人がいるとします。そこを出会いのチャンスと捉えて声を掛けるか、チャンスに出会ってもそこに自分が求められているわけじゃないと考えるか、どう思うかで変わっていくように思います。

――場数というか、声を掛ける訓練や準備ができているかもありますね。

大澤：繰り返し経験することで、少しずつ慣れていくことなのかもしれません。

特別なことではない、日常で共に生きるということ。

――今年度のダンス公演では「夢」というテーマが映し出されました。この取り組みを通して、どんな夢を抱かれましたか？

森田：いろんな身体の人と作品をつくりたいという思いをずっと抱いています。ここでとってもいい経験をさせてもらっているので、もっと広がっていけばいいなと思います。いろんな人が来てくれる環境って難しいのですが、それがこの劇場なのか、そうじゃない場合もあるので。

――どんどん日常に近づいていくといいですね。

森田：そうです。こういう場がいろんな所にあるといいな、特別なものにならないではしないなって思います。

草山：実際のダンスの舞台は2年目、取り組みとしては3年の間に森田さんと「まだまだほんの一部だよね」と話しています。常連のファンの方、障害のある方も、本当に楽しみにして来てくださる。実は新型コロナの濃厚接触者になってしまって舞台に出られなかった方がいて、とても残念でした。障害のある方でアクセス的にこの場に来られない方もいます。これからもっと参加してもらえる仕組みを考えていますし、傍観人としては福祉とアートをつないでいきたいと思っています。

――私たちが今日体験したことは、日々の生活にどういかしていくことができるでしょうか？

大澤：いろんな人間が、自分の中に同居していると思うんですね。私という一人の人間の中に、いろんな人間が折り合いをつけながらその日その時を生きている。同時に、周りで共に生きている人たちも、それが家族であっても自分とは違う人間です。ダンス公演に出てきた「夢は難しい」ということが、同時に起きていると思うんです。夢を見るのを諦めるのと、現実には難しいと思いながら夢を見続けることを、日常生活や自分の中でどう折り合いをつけるか。「夢を一緒に見たい」と思いながらもやっぱり難しいことだと向き合う。でも夢を見続けることを諦めない。それを繰り返すうちに、最初は遠くの方にあった夢が、もしかしたら近づいてきていると思う瞬間がある。だから「共に生きる社会」は自分の外側にあることではなく、自分の中に引き受けながら生きていくということではないでしょうか。そのことを今日、持ち帰ってもらえるといいなと思いました。

――素晴らしい時間を、皆さんありがとうございました。

森田：ありがとうございました。これからもいろんな人を巻き込みながらやっていきたいと思います。よろしくお願いします。

大澤寅雄基調講演

「自身の身体はどこで線引きできるのか、考えることはあります か？」という問いから始まった、大澤氏による基調講演。無症状の陽性反応が出てしまうコロナ禍で、「だるいな」「仕事したくないな」という思いが病気からくるものなのか、怠け者だからなのか分からないことが起きているように「障害と健常」の線引きも曖昧で、鬱々とした気分の時もあれば そうでない時もある。健常との線引きは難しいとした上で、森田さんの言葉が紹介されました。その一つ「障害者側も健常者側も、これができますとちゃんと言える言葉を持ってください。チャレンジできる環境を一緒につくりましょう」というメッセージ。これは、誰かと一緒にダンスをつくることだけでなく、見る側にとってもチャレンジではないかと、会場の観客に呼びかけられました。

見たいと思わないものや、見えにくいものをどのようにまなざすか？ この日の公演も「すごく楽しそう」「上手だな」という部分とよく分からない部分があって「何が言いたいの？」と疑問が生じる。その時に自分の中で何が変化しているのか考えていたことを、感想として語られました。

最後に、数年前に訪れたドイツで移民の排斥運動が起きていたことに触れ、ベルリンの劇場に張られていたポスターがスクリーンに映し出されました。英語で書かれた「EVERY SINGLE ONE OF US」という言葉の意図は「私たちみんな」ではなく「私たち一人ひとり」であり、「異なり」を尊重する態度と折り合いのつけ方が表れていると説明。「みんな違って、みんないい」という言葉も結論ではなく前提であり、そこから対話の態度や方法が生まれるのではないか。共に生きるための方法こそが文化であるとお話しいただきました。